

聖徳太子の墓

京都橋大学
名誉教授

猪熊 兼勝

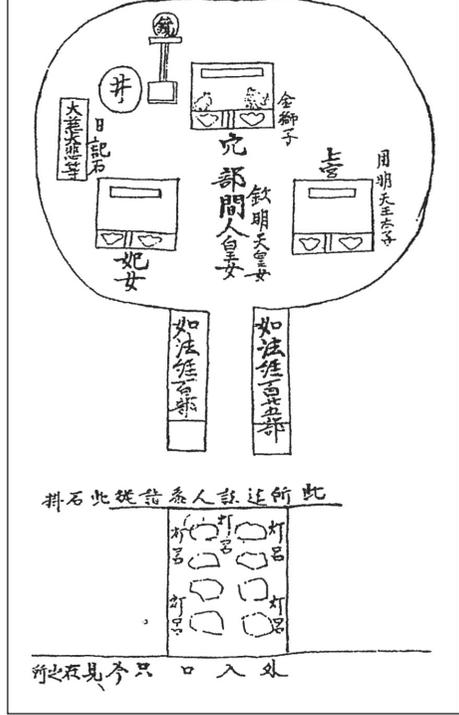
『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』によると、推古三十年、斑鳩の近く泡波宮あわなみのみやで聖徳太子（厩戸皇子）は病床に臥していた。田村皇子などが見舞うなか、『上宮聖徳法王皇説』によると、二月二十二日、太子は逝去する。『日本書紀』は推古二十九年二月五日夜半、斑鳩宮と記し「天下の人民は、老いも若きも泣き叫ぶ声で溢れた。日月は光を失い天地も崩れたようだ」などと悲しみを表現した。それは釈迦入滅のようであり、法隆寺塔初層の塔本塑像の涅槃像を思わせる。斑鳩宮南庭あたりで殯が執り行われたのだろうか。後にこの場所に夢殿が建てられ、太子を追善する救世観音立像が祀られたと思う。太子逝去の前年末、夜空に大きな赤い星が尾を引いて流れた。間もなく太子の母・間人皇女、太子妃が相次いで亡く

なった。流れ星は、太子一家の死を暗示したのだろうか。三人の柩は、二上山の西麓磯長谷の墓に埋葬された。そこは太子の父・用明天皇陵の近くで、太子も熟知した所であり、奈良時代に残された『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』にある泡波宮での臨終のなか熊疑精舎を百済大寺へ移築など、将来へ託した指示を勘案すると、墓地も自らの思いがあったのだろうか。やがて、残された三人の太子の妃たちは旅だった天寿国を一目見たいと思いい、渡来人東漢氏の画師に描かせ、采女たちが刺繍して「天寿国繡帳」を完成させた。

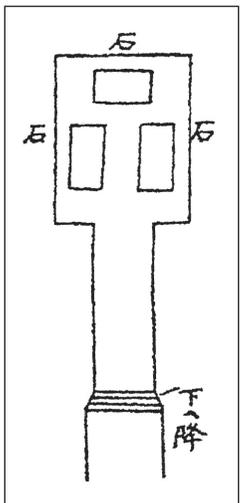
今、私達は、大阪府太子町磯長谷の叡福寺の正門階段を登ると正面に太子墓が見える。叡福寺が史上に登場するのは、鎌倉時代に始まるとされており、伽藍配置から見

ても正面の聖徳太子を祀る寺院である。東大寺の再興で有名な重源らによる仏堂建立に始まるもので、境内の円墳を聖徳太子墓と治定したのは明治八年のことであった。その根拠は『延喜式諸陵寮』記載の「在河内国石川郡」と叡福寺に伝わる太子墓伝承の強い横穴式石室であった。また、江戸時代、東本願寺十九世法主・乗如が参拝のため入室した凶面が残る。治定後四年、宮内省大澤清臣、六村中彦によって、当時、開口していた羨道を封鎖する前に、石室内部の調査が行われた。その際『聖徳太子磯長墓実見記』が報告された。この調査には同行した神職であり画家の富岡鉄斎による素描がある。後に大阪造幣局の技術者として来日した考古学愛好家のウイリアム・ゴードランドが大阪、奈良の古墳の調査を行い、

此九代御廟圖

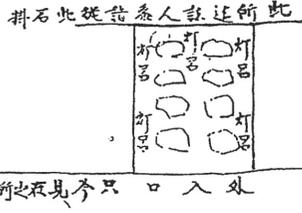


太子御廟窟絵



富岡鉄斎素描

奈良県明日香村の近鉄飛鳥駅西の岩屋山古墳の実測をしていた。こうしたデータをもとに考古学者・梅原末治、森本六爾が復元を試みた。梅原は『実見記』と岩屋山古墳の類似性に気付いた。こうした研究成果を参考にして、太子墓のある河内飛鳥の近つ飛鳥博物館に玄室内部の実大復元模型が展示されている。



太子御廟窟絵

- 『実見記』をもとに内容を要約すると、
- (A) 横穴式石室、(B) 玄室、(C) 棺台、(D) 墓誌
 - (E) 室礼に要約できる。これを考古学的表現に転換してみよう。
- (A) 丘陵南斜面の南に羨道を設けた横穴式石室は、大型の切石で築く。石室全長は一・二・七二メートル。羨道の規模は、高さ一・九四メートル、長さ七・二七メートル。その石組は両側壁とも四枚の切石を並べ、天井石を三枚載せるため、側壁と天井が接する目地は揃わない。
- (B) 玄室は、高さ横幅とも各三・〇三メートル、奥行きは五・四五メートル。両側壁は巨石を二段積みにし、下段を三枚、上段を二枚の

計五枚を積上げた布積みなる。奥壁は二段積みで、天井も二枚被せる。

- (C) 玄室内に凝灰岩と推測する長方形の切石が三個、品字状にある。三個とも棺台と考える。その配置は、奥壁正面に一個と手前の左右に各一個である。奥壁の一個は東西が長い長方形で、高さ〇・四九メートル、長さ二メートル、幅〇・七六メートル。その上面を手水鉢のごとく彫窪み、深さ〇・一八メートル、窪みの両端を〇・二四メートルと深くして水抜きを穿つ。東棺台は高さ〇・六一メートル、長さ二・四二メートル、幅一・一一メートルで、長辺を南北に据える。西棺台は高さ〇・六七メートル、長さ二・一七メートル、幅〇・九一メートル。手前の二棺台は同じ高さで、上面が平坦である。三棺台とも側面は、半肉彫の格狭間で裝飾する。
- (D) 三棺台の周辺に朽ちた板状をした破片が散乱していたので、回収すると三六センチありあった。破片は布を重ね漆で接着した脱括乾漆の夾紵棺片であった。

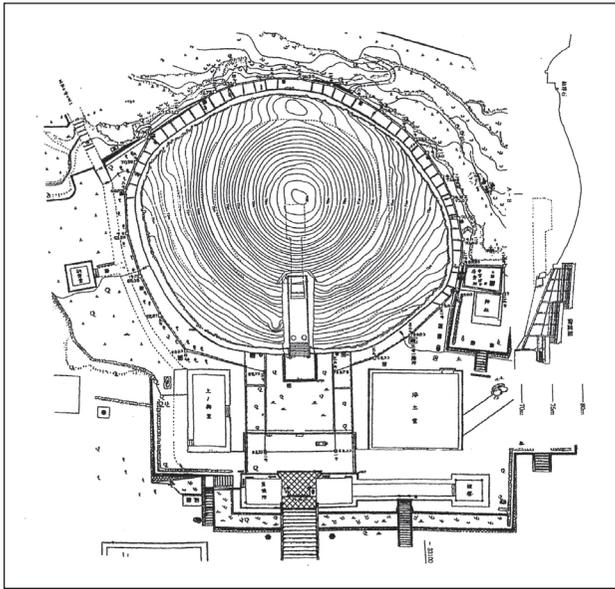
(E) 東本願寺の十九世法主兼如が参拜のため入室時、墓誌、碑文を見ている。その図面は玄室を横長の楕円形に描く。棺台の格狭間、井戸、鏡台、日記石は詳

細に観察しているが、石室には注意が払っていなかったのだろう。

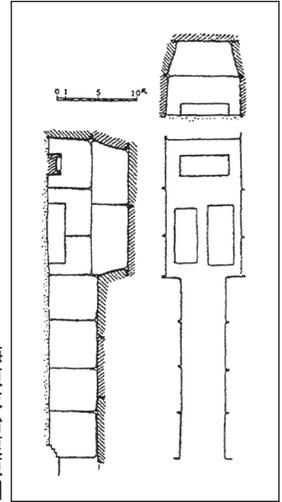
こうした記述から、太子墓の内部の様子が分る。それでは項目別に問題を整理してみたい。

横六式石室

乗如の入室図の如く、江戸時代に描かれた入室図は石室を円形に描いている。暗い石室の形には関心がなかった。これに対し富岡鉄斎の素描は、その後の横六式石室図の原点を思わせる。『実見記』の観察は石室細部の寸法を記録しており、鉄斎もそれに倣ったのであろうが、当時、子息の謙蔵（後、京大講師・考古学）は十六歳の考古青年であり、謙蔵の協力があつたとも考えられる。梅原はこの図に触発され、岩屋山古墳を参考に太子墓を復元した。この岩屋山式石室の提唱者・白石太一郎氏によって岩屋山古墳は七世紀第3四半期説が強調されていて、叡福寺の古墳を聖徳太子墓とした場合、改修を考慮されている。『実見記』にはふれていないが、平成十九年、宮内庁書陵部の調査によ



宮内庁調査墳丘図



梅原末治復原図

ると、墳丘は直径四〇メートル、高さ六メートルの二段築成の円墳である。二段築成円墳は高松塚古墳、キトラ古墳、マルコ山古墳があり、いづれも七世紀後半〜八世紀初頭に集中する。

格狭間のある棺台

玄室内に棺台を品字型に配置する。ここでは奥壁に沿う棺台を石棺身と理解される場合が多いが、深さ一八センチメートルの浅い石棺身はない。実際、遺骸を納めるには、かなり無理がある。手洗鉢へ加工前は、上面が平坦な棺台だったのであろう。三棺台とも側面に格狭間を半肉彫にする。明確な棺台の姿は、孝徳陵としよう御嶺山古墳、鎌足墓とする阿武山古墳。そして天武陵がある。御嶺山古墳と天武陵級の棺台側面には材質が金銅、石と異なるものの格狭間で装飾する。こうした重厚な棺台は、七世紀後半の天皇陵クラスであることは、一目瞭然である。その発想は、仏象台座や仏具台の装飾にある。例えば、明治時代に法隆寺から皇室に献上された金銅阿弥陀三尊像の須弥壇に格狭間を飾る。三尊仏と台座は別鑄であるが宣字形の台座下に格狭間を開けた須弥壇が

付く。台座背面に「山田殿」の名を刻む。大化改新の新政府で挫折した石川麻呂の菩提を弔ったと思われることから、殺害の大化五年以降の作品である。また、天武朝に作られた兵庫県加西市の古法華石仏や、天智朝の滋賀県崇福寺出土舍利容器に格狭間がある。棺台に格狭間を刻んだのは、釈迦礼拝と同様にする被葬者崇拜の荘厳であった。

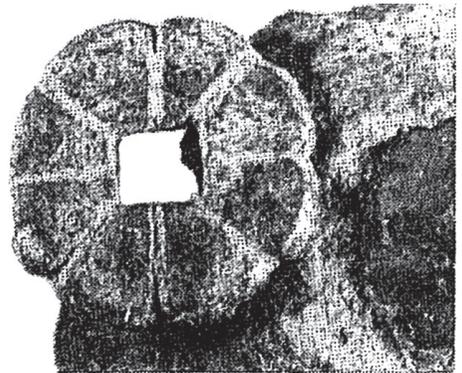
『実見記』には、棺台周辺の棺片を集め、日光に照らすと、布張り黒漆の夾紵棺片であることが分った。これは木型に麻布を張り、漆で接着を重ね、厚みを持たせ型抜きしたもので、完全な姿は、長持形の阿武山古墳の柩で知られる。しかし、阿武山古墳の夾紵棺は、石室に再埋葬されたため、現在、観察できるのは、牽牛子塚古墳出土の断片である。

夾紵の技法は仏像技法の脱括乾漆に該当する。対応する木芯乾漆像は、木像に布で下張り、漆を重ね塗る。両技法を対比すると、夾紵は脱括乾漆より高度な技術と製作時間が要求される。これを柩に対応する身分差として見ると、漆塗木棺より夾紵棺がより高級性があるろう。ところで、脱括乾漆

像は、わが国で何時から登場するかが問題である。現存する最古の脱括乾漆像は、奈良県当麻寺金堂の四天像で天武朝の作品である。夾紵棺も同時期の作品と思う。

牽牛子古墳出土の夾紵棺の表面には、八花文座金具の圧痕が残る。これと一致する金銅製の八花文座金具が出土していて、中央に方形の孔をあける。他に環釘を挿入した六花文座金具もある。御嶺山古墳から漆塗木棺が出土していて、金銅製の九花紋座金具に環釘と海老錠がある。これは銅製の板棒を差し込んで開けるバネ式の鍵と呼ぶ。中国では唐代の箱に施錠される。高松塚古墳、キトラ古墳、マルコ山古墳からも漆塗木棺とともに金銅製八花紋座金具が出土する。漆棺は施錠されていたが、『実見記』には鍵の記載がない。残っていないがなかったらう。

太子墓の棺台は共通し、採集した夾紵片は棺の用材で、三棺用だろう。その形状は、他の類例から推測すれば阿武山古墳や法隆寺塔本塑像に求められる。後者は仏陀の金棺出現を表現し、和銅四年の製作である。柩は、阿武山古墳と同形であるが、表面を唐草紋で装飾する。柩は棺台より小さ



牽牛子塚古墳 夾紵棺と金具

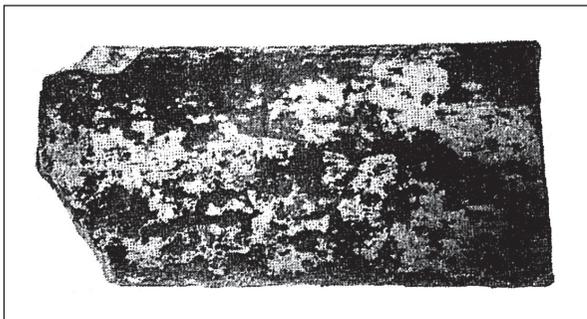
く、阿武山古墳では、棺台に対し柩の長さ八七割である。法隆寺塔本塑像は九〇割で棺台の左右を均等に空ける。太子墓の東棺台の長さは二四二センチ、幅一一一センチで、阿武山古墳と法隆寺塔本塑像のデータから復元すると、東棺台の柩の長さ二一〇センチ、幅一〇〇センチほどになる。西棺台の長さ二一七センチ、幅九一センチで、柩の復元は、長さ一九五センチ、幅八一センチになる。こうして見ると、高松塚古墳の漆塗木棺の長さ一九九センチ、阿武山古墳の夾紵棺の長さ一九七センチは西棺台に近い。寸法から推して、これを太子妃の柩とすれば、太子の柩

はもう一回り大きい。古代の貴人の立位置は、相対する二者が並ぶ時、奥壁から見て左が高位となる。例えば左大臣・右大臣でも理解されよう。とすれば、向かって右(東)にある棺台が僅かに大きく、聖徳太子の棺台としたい。江戸時代以来入室した僧侶によって、石室内の三石について、具体的な被葬者を挙げてきた。奥の石棺(棺台)を太子の母で用明皇后の穴穂部間人皇后、東の棺台を聖徳太子、西の棺台を妃・膳部菩岐々美郎女としてきた。その根拠は明確でないが、正面を太子の棺台としないところに意味があるのだろう。それは親を敬う道教や儒教思想と先に逝去した間人皇女を墓室内の優先順位としたことによるものだろう。

それでは、太子墓で採集された夾紵は現存しないのだろうか。大阪府柏原市にある玉手山安福寺に夾紵の断片が伝わる。これは絹布を重ねた長方形の夾紵板で高さ四七・五センチメートル、幅九四センチメートル、厚さ二センチメートルで、三端部が同一方向に折曲がり、残る一端は縁部で完存する。形状から箱側部で、技法から古代の夾紵片に間違いはない。後世、太子信仰が進行するとともに結縁の証しとし

て、室内の品物を持ち出された可能性がある。この漆板を柩とすると、天皇級の夾紵棺で、南五キロメートルにある太子墓のものではないか。法量から太子棺の小口部分と推測を重ねたとも云えるが、私はこんな夢を抱いている。

こうして太子墓を検討すると、柩の夾紵棺、格狭間のある棺台は七世紀後半の要素が高い。岩屋山タイプの横穴式石室は七世紀後半とされている。二段築成円墳も同時期の特徴である。そのことは、宮内庁の調



玉手山安福寺 夾紵片

査による羨道入口側石の加工状況からも蓋然性が強い。

江戸時代の石室図絵を見ると、正面の柩前に金色の狛犬を一對置かれ、西に井戸を掘り、西壁に接して日記石を置く。本来、清涼殿の日記は、村上天皇ら三帝の年中行事の先例を記したもので、太子墓ではどのようなになるのだろう。そして井戸の背後の鏡台に鏡を掛けていて、地下の清涼殿を意味していた。このように太子墓は、天皇陵クラスの古墳のなかで、古代以来、近世まで太子信仰に護られて、叡福寺によって保存、伝承されてきた。九世紀の延喜年間以来、十七世紀の元禄年間まで検証されなかつた天皇陵と大きく異なる点であろう。磯長墓は聖徳太子の墓には間違いはないと考える。しかし、記録に基づく石室内容は、太子逝去より半世紀ほど後世の室礼である。飛鳥時代、天皇は崩御すると宮殿南庭か、その近くに殯宮を設けた。それは王権の継承準備と造陵の期間でもあった。聖徳太子は斑鳩の地で殯を行い、河内飛鳥の磯長谷に埋葬された後、半世紀後、七世紀後半、おそらく天武朝の頃、再び改修と改葬が行われた姿と理解している。